

東京 陵水

賀 正
平成28年 元旦
陵水会東京支部役員一同

平成二十七年東京支部総会

新支部長に小梶清司氏(大18)就任

母校飛躍の年、陵水会挙げて応援を！

年頭所感

東京支部長

小梶 清司 (大18)

東京陵水の皆さま、明けましておめでとうございます。昨年七月の支部総会で支部長をお引受することになりました。これまで五年に亘り幹事長として谷前支部長他、執行部の皆さんと共に微力ながら支部の運営に携わってまいりました。この間、会員の皆様には幅広く色々とお世話になり有難うございました。



さて昨年はまさに地方国立大学が大きくクローズアップされた年でありました。先ず嬉しい話としては、今回も我が国から二名のノーベル賞受賞者が生まれ、しかもその両氏が何れも地方大学出身者であったことは、似た経歴にある我々にとつて何か心温まるものを感じさせてくれました。

また別の話としては、文科省が六月に出した「教育・人社会部」の見直しについて」の通知が各界から、大学教育の本質を理解しない極めて不適切なもの」と不評を買い、影響の大きい地方大学を代表する形で、佐和隆光学長もテレビや雑誌に度々登場され、堂々とした論陣を張られました。文科省は慌てて釈明に追われましたが、経団

目次

1面	年頭所感(小梶支部長)
2面～4面	二十八年・二十七年総会
5面～9面	「こんには」
10面	新支部構想と 母校の行方
11面～15面	主張と趣味
15面	陵水会クラブOB報告
16面～18面	陵水会東京支部 クラブ活動
19面～20面	同期会報告
21面	会費納入者一覧
22面	広告・奥付

連まで異論を唱える事態となり現在に至っています。

大学教育の在り方を巡っては、古来色々な視点からの議論があるかと思いますが、現状がそのまま肯定されるものでも決してなく、時代の変化に対応して在るべき姿を追求する飽くなき努力が常に必要なことは言うまでもありません。特に母校のように近年大きな変革もなく、既存

学部の拡充で何とか時代の波を掻い潜って来た大学においては、尚更と言えるかも知れません。

今般、佐和学長の強いリーダーシップの下、開学以来初の新学

部「データサイエンス学部」構

想が浮上し、現在着々と来年四

月の開学に向け準備が進んでい

ることは誠に頼もしく、また嬉

しいことであり、本格的なIOT

時代に突入しつつある我が国

の評価を一層高からしめること

を確信させるものでもありま

す。こうした動きの中に在って、

陵水会としても今後どのような

形で母校を応援して行けるのか、また望ましいのか、皆様からのお知恵も拝借しながら、支部共通の課題として取り組んで行きたいと思ひます。

また陵水会の抱えるもう一つの課題としては、発足来幾多の

素晴らしい経済人を輩出し、社

会において確たる地位を築いて

きた我が同窓会も、七年後には

創立百周年という記念すべき年

を迎えますが、この間の時の経

過と共に、会員の気質や同窓会

に対する価値観も徐々に変化し

て来ております。これは陵水会

に限らず、一般的な社会現象で

ありますが、こうした変化に如

何に柔軟に即応して行けるかが

今問われています。

東京支部も現在一、七〇〇名

前後の会員が登録され、例年七

月開催の支部総会には此のと同

ろ毎年二〇〇名以上の参加がす

っかり定着して参りました。し

かしもっと若い層や女性の参加

を促したいという趣旨もあつて、

昨年九月にはこうした層を対象



にした別途懇親会を幹事さんにごお願いして企画して貰いました。主にフェイスブックでの繋がりを基に、口コミ効果もあり、何と七〇名の若人が一堂に会し、楽しく交歓することが出来ました。参加者の多くはかつて総会に参加の経験は無く、支部名簿でも登録されていない皆さんでした。今年の支部総会はどうしたか、人達にも積極的に呼びかけ、母校の新たな門出を満場の皆様と共に盛大に祝したいと思ひます。引き続き全ての皆様からのご支援・ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

この新しい年が会員の皆様にとつて幸多く、また素晴らしい年となりますよう心から祈念申し上げます。

【収入の部】

年会費収入 一、四五〇、〇〇〇
 総会会費収入 一、四五〇、〇〇〇
 寄付金収入 一〇〇、〇〇〇
 新聞広告収入 二四〇、〇〇〇
 本部活動助成金収入

一三三、〇〇〇
 雑収入 五、〇〇〇

前年度繰越金 一、三六〇、七九七
 合計 四、七二八、七九七

※交通費は就活相談会への若手
 OB派遣交通費の来期より本
 部全額負担へ変更で減額。

新入会員の感想

「東京支部総会に参加して」

●この度は、陵水会東京支部の
 総会にお招きいただき、誠にあ
 りがとうございました。

総会は、私が社会人になって
 から、初めての母校の諸先輩方
 とお会いする機会でした。これ
 ほど大勢の方がいらつしやると
 は思わず、常に緊張しておりま
 したが、皆様が暖かく迎えてく
 ださったお陰で、有意義な時間
 となりました。

様々な業界でご活躍されてい
 る方が多く、大変心強く感じま
 した。加えて、自分も頑張らね
 ばと気持ちが引き締まる思いで
 した。

またお会いできる事を楽しみ

にしております。これからもど
 うぞよろしくお願ひ致します。

李 文哲

●私が東京支部総会に参加した
 きっかけは、以前からお世話に
 なっていたOBの方々からお誘
 いを頂いた事でした。

実は、最初に東京支部の行事
 に出席させて頂いたのは当時私
 が3年生だった時の事です。
 大学で所属していたサークルが
 日経TESTの団体戦で一位に
 入賞し上京した際、東京支部の
 方々が設けて下さったイベン
 トに伺い様々な先輩方と交流さ
 せて頂きました。就職活動の前
 線に居た私たちにとって、大変
 貴重な経験となったのを覚えて
 います。

その後も東京支部の方々と
 の交流は続き、先輩が彦根にいら
 した時に食事に誘って頂いたこ
 ともありました。また幸運にも
 日経TESTで連覇を果たした
 4回生の夏には、日経本社での
 授賞式で東京支部の方に再会す
 ることが出来ました。

今年の四月に入り、都内の会
 社に就職した私に最初に連絡を
 下さったのも東京支部の先輩方
 でした。総会当日は、以前より
 多くのOB・OGと交流しながら
 ら業界研究を進める事が出来た

と思います。学生の間にお世話
 になった方々や彦根で一緒に学
 んだ他の新卒学生と再会するこ
 ともでき、少しほっとした一日
 でした。

例えば今日まで諸先輩方にお
 世話になつてばかりの私ですが、
 今後は一人の若手として東京支
 部を盛り上げていけるよう、努
 力させて頂きたいと考えており
 ます。

●一言で申し上げますと繋がりを
 感じる会でした。

丹羽 伸茂

ゼミの同期に誘われて参加し
 たのですが、参加して良かった
 です。大学時代には話をしたこ
 とのなかった同期生と繋がりを
 作ることができた上に、ほんの
 一部ですが、滋賀大学のOBの
 方々ともお話ができ、大変有意
 義な時間を過ごすことができました。

正直な所、大学時代は同じサ
 ークル、受講している講義が同
 じ仲間としか話す機会が少なく
 自分の交際範囲が広くなかった
 ことから、卒業し、このような
 形で新たに友人や先輩方とお話
 させて頂ける機会があることに
 感謝致します。

滋賀県から離れている東京で
 もこのような会が開かれること
 に、滋賀大学での繋がりがや歴史

の深さを知ることができると
 機会になりました。
 また、このような機会があり
 ましたら積極的に参加したいと
 思います。

田畑 昇龍



盛り上がる宴席



守谷貞夫支部長（当時）挨拶



女性会員の微笑が華をそえる



現役の諸君・写真部と新聞会



新陵会の詩吟と剣舞

（総会寸景）

こんにちは

森口修逸氏（大21回）

（もりぐち しゅういち）

株式会社エム・ピー・オー代表取締役。去る九月一日（火）横浜市のオフィスを訪問しました。多くのお話をいただきましたが、紙幅上少なからず割愛部分があることを了承下さい。



——本日はお忙しいところ、ありがとうございます。東京陵水「一〇三号」にご登場いただくと思っております。ご出身は京都でしょうか……

森口 はい。私の家は「喜志元」という京都・下河原の小さな旅館でした。谷崎潤一郎が終戦後間もなく、食べるものもない時

代で岡山から米を持って来て、これで泊めてくれと、数カ月滞在したそうです。ちょうど「細雪」を執筆していた時期です。

——谷崎潤一郎のゆかりでもあるんですね

森口 はい。「婦人画報」誌に掲載されている喜志元の写真を見ながら、これは谷崎潤一郎が泊まっていた部屋です。彼が誘って、色んな人を連れて来たんです。歌人の吉井勇も陶芸家の河井寛次郎も遊びに来ており、彼らの作品は今も我が家にあります。その後も、能の梅若六郎（人間国宝）がよく来ましたが、長唄のお師匠さんの杵屋弥三郎（東千代ノ介の実兄）は三味線を置いて毎月、芸子さんに教えるに来ていました。京焼きの永樂善五郎もたまに食事に来館しています。浜美枝、江波杏子は喜志元で映画化粧をして、タクシ

ーで太秦に行っていました。その後、父が病気になる「おかみ」であった母が私たちの住む横浜に来ることを決断して、妻は同居を了解してくれました。喜志元は平成二十二年に閉めています。

——そうですか。森口さんはここでお生まれになったんですね。ところで、お父様はなかなか厳

しい体育会系だったそうですね……

森口 父は、旧制中学から同志社高商を卒業したんですが、ずっと陸上部で中長距離や駅伝をやって、戦時中では早稲田で箱根駅伝に出たかったと言っていました。横浜で両親と同じようになり、私も父も初めて現地で箱根駅伝を観戦しました。私は小学校四年生から運動会前には朝六時に起こされ、実家のすぐそば、円山公園の枝垂れ桜の周りで走る練習をさせられました。それが花開いたのは同志社高校でサッカー部に入ってからです。滋賀大の部対抗駅伝でも琵琶湖沿いの最長区間を激走しました。

——そういう老舗の旅館でお生まれになって、滋賀大を選ばれたのは何か理由がありましたか？

森口 本当は当時、喜志元で同居していた叔父が学んだ、京大の文学部が希望でした。小学校から地理が好きで、高校時代には叔父から東西交渉史の楽しさを学びました。一方、京大経済学部卒業の母方の叔父からは「経済学部卒はつぶしがきく」と言われていました。我が人生を振り返るに「つぶしがきく」の言葉は至言であったと……。

——浪後、東大紛争もあり結果的に二期校の滋賀大経済学部に入った訳です。滋賀大入学後、部に昇格したばかりのサッカー部に入りました。大学の先輩が勧誘で家まで来られたのにはびっくりしましたが……。

——大学生活はいかがでしたか？

森口 入学してすぐの六月から翌年一月末まで大学紛争で封鎖され、サッカーのために大学に行つたようなことでした。封鎖が解けても勉学に勤しんだとはとても言えず、父から「大学は勉強する場ではなく、人とのつきあひ方を学ぶ場だ」と言われていたのが救いでした。それでも落第することなく四年間を終えました。城下町彦根は好きでした。

——ところで、森口さんはコンピューターの専門のお仕事をなさっておられますが、その頃から大学にコンピューターはありましたか？

森口 小倉（栄一郎）教授の電子計算機入門と、さらにプログラミングを受講しました。文系では電算機の授業が少なかった時代でしたが、日立のコンピューターが計算センターに入っていたんです。

——ほかに学生時代の思い出は？

森口 就職も決まって、四回生の夏休みに行った七十日間の英国でのサマースクールとヨーロッパ旅行が大切な思い出です。往復の飛行機と到着地パリ、帰国地コペンハーゲンの各一泊のみで他は自由行動という、学生ばかりを集めたツアーでした。就職が決まり、大学の単位は学年必須以外はすべて取得済みでしたので、家でごろごろしていました。母にはよほど目障りだったんでしょう。「そんなにごろごろしてるなら海外でも行つてきなさい！」と多分、叱つたつもりだったのです。これが五月末。たまたま、直後に大学の友人から格安の旅行社のツアーを教えられました。そこで、父親に銭湯で「母ちゃんにこんなこと言われた」と相談したところ、「言うくらいいやから母ちゃんが金を出せるんやろう」と、勧めてくれました。すぐにバスボートも手配して、サマースクールは京都にあったブリティッシュカウンセルで見つけ、六月二十九日には羽田から出国したのです。ドーバー海峡の白い壁、ケンブリッジでの四週間のサマースクールと本場の芝生園地で

のサッカー遊び、パリのモンマルトルの安宿での四日間、英国の学友のカルメンさんの豪邸に宿泊したマドリッド、夢の島カプリ島、フイレンツエのダビデ像やスイスの美しい山々に感動しました。旅行の終盤で、オランダの大学町ライデンの家族経営のペンションでの少しゆったりした気持ちで過ごした二日間も良い思い出です。ミュンヘンで行われたオリンピックで米独戦のサッカーも観戦しました。明日入国する国の通貨は？ホテルは？ その国の言葉での「おはよう」は？ 準備期間がなかったため、すべて夜行列車中での一夜漬けでした。

——すごい旅行ですね

森口 一人での未知の西欧大旅行は、ワクワクとトラブルの連続でした。これまで勉強した英語と地理と世界史の知識を総動員した旅行です。同志社中・高の毎朝の礼拝と聖書の知識のおかげでケンブリッジCatholic Churchに逗留中のオーストラリア人の牧師さんと仲良くなり、毎夕食後に訪問するとバイオルガンで「トッカータとフーガ」を聴かせてくれました。——日立に入社された経緯は？

森口 三回生の期末試験が二月

二十八日に終わった翌日に、日立製作所が彦根に勧誘に来たんです。私は、日立ってよく分らないけれど、とりあえず経験のために行こうと……。それで市民会館の二階で説明会をやるというので行っただけです。一時

間位して突然、ここに来ている人は弊社に興味あると思うから試験します。と言って試験用紙を配り始めました。そんな無茶な、と思つて……。実は印鑑どころか鉛筆も持つて行つてなかったんです。日立の人に貸してもらつてそれでやりました。試験が終わつたら、午後面接しますと……。日立本社の人事課長が来ていたんですね。「私は採用権限がありますから、ここで決められます」

——説明聞きに行っただけなのに……

森口 午後の面接で、お前の論文は滅茶苦茶だとボロクソに言われまして……。落とす気ならそんなに言わなくてもいいのに、この野郎！ と思ひながら一応受け答えした、それが良かったのですかね。本当は商社希望だったので、日立に正式内定する前に、御堂筋の商社をまわり一社は社長面接までいったのですが駄目でした。それで仕

方なく日立に行くことになりました。

——入社後は……？

森口 まず、茨城県の日立市で十日間の新入社員研修中に、希望も無視して、名古屋営業所に配属されました。重電部門でトヨタ担当の営業をやることになりましたが、私は車に興味はなかったし、車しか作れないトヨ



タつて大丈夫？ と疑つていたんです。これからトヨタが渾美半島の田原に大工場を作る、その準備にピカピカの学卒新人を採用・育成するというところで森口が配属されたらしい。ところが昭和四十八年入社・配属のまさにその年の九月にオイルショックが勃発し、トヨタはこの計画を凍結しました。トヨタ本体

から重電の注文がないから、トヨタ関連の既納製品の保守の支援業務をさせられた挙句、入社二年半で重電の営業からコンピュータへ。ただ、企画職試験で「トヨタからはコンピュータを受注すべし！」と言い残して異動になりました。

——そこから始まつたんですか。今のお仕事の関係は……

森口 そうですね。昭和五〇年九月からコンピュータの営業になりました。普通、コンピュータに配属されたら三〇六カ月位本社でちゃんと教育を受ける訳ですが、私の場合は名古屋営業所のお客様向けの教育センターで、お客様と一緒にコンピュータ教育という促成栽培でした。私にとつての最大の成果は教育センターの先生を嫁さんにできたことでした。嫁さんはその時は入社前で、五年後のことです。

——それは最大最高の成果ですね

森口 私は異動することを全く知らない内に、雑誌の定期購読で勉強し、第二種情報処理技術者という試験を申し込んでいて、この時の教育受講中に受験し合格しました。当時は資格を持つている人も少なく、自信がつき

経営再建コンサルタント協同組合

理事長 長井和男 (大22回)
公認会計士

〒103-0028 東京都中央区八重洲1-5-4 共同ビル(八重洲口)505

TEL 03-5255-3511 FAX 03-5255-3512

E-mail : nagai@sai-ken.or.jp

ました。

——教育センターには色々お世話になったんですね

森口 はい。途中からコンピューター営業に異動で大変でした。担当する中小型コンピューター

を販売するために、農協、市役所、流通等へ東海四県をあちこち本当に自分の足で歩きました。

愛知県内の市役所関係では全然相手にされなくて……。また

ま、その関係で市立病院へ行く話を聞いてくれることが分

りました。しかし一年半位でコンピューター営業から、さらに

システムエンジニア（SE）に異動になる訳です。名古屋市立

緑市民病院はSEとして対応したので、病院長の人から、「貴

方が熱心であることはよく分かった、ついては、医療が分かっ

ている人を連れて来てくれ」と言われました。自分が医療のS

Eなのに……。ガツクリとはしました。が、本社の医療システム

の人に客先で講演してもらったんです。これで一発で決まった。

分かった！もうあなたに決めた、と。緑市民病院から注文頂

いたんです。

——やりましたね！

た。ただ、国の制度変更がある。都度システムを修正していかないといけないんです。毎年の医療費改訂がえらい大変でこんなことやっておれないと思いま

分析して三〇分以内に自動的に結果を報告せよという顧客（病院）からではなくトヨタ自動車の生産技術部門）からの要求仕様でした。提案した搬送装置は

元々、半導体ウエハー搬送装置でした。試験管立てを空気浮上し、リニアモーターで高速に搬送する。顧客の病院担当及び検査機器メーカーとの業務の打合せは私が取り纏め、日立社内の

重電のチームと協力して工夫を加えて、商品として完璧なものを作りしました。このシステムを管理するのは日立がトヨタから初めて受注した大型汎用コンピュータでした。完成間近に豊田英二会長が視察に見えました。

このシステムは、私が日立退社後も十年間稼働し続けました。苦勞して良い仕組みを作った証拠だと誇りに思います。

——最高のヒットですね

森口 私は、これをトヨタの病院だけでなく多くの病院にも販売できるように、システムの機能や処理の方法を、導入の際に取捨選択できる汎用的なソフトウェアとして作ったんです。

再販し、売上をN倍化できると思っていました。けれどそれは殆ど認めてもらえなかった。これは名古屋で勝手に作ったもの

で、本社はタッチしていかないよと言う風に思われた気がします。これは非常に不満でした。

——森口さんが考えていることを分かって、動いてくれる人が本社に居れば……

森口 名古屋ではいろんな経験をしましたが、平成元年に本社へ転勤になるんです。当時は新川崎のツインビルにソフトウエア工場の本社があり、そのビジネスシステム開発センターへ転勤して、戦略情報システム（SIS）のコンサルタントとして

経営戦略の世界へ転進しました。これまでの経緯もあって、医薬品卸業界を希望しました。本

当にやりたい放題やらしてもらった。必要なら米国でも行けるよというところで、実際米国にも視察に出張しました。当時、医薬品卸は三〇〇社程あったのです

が二桁に集約されていく過程にありました。私は静岡県にある

医薬品卸会社の会長・社長や役員向けに一年間かけて、これらの医薬品卸は如何にあるべきか？というコンサルをやり

ました。調査や情報収集のために、医薬品メーカー、医薬品卸、医師会はもとより、国会図書館へ行ったり、厚生労働省に医薬分業のヒアリングもしました。米

国への出張では現地の状況を調査し、ミネソタ州立大学ではインフォームド・コンセントという思想を聞いて驚きました。当時の日本では癌は本人に知らせたらダメだよという時代です。

そういう時に、治療方針を話し合うために、本人にインフォームした上で同意を取る、今では常識ですけど……

——コンサルテーションの資料は森口さんが纏められたんですか？

森口 はい。医薬品卸は医者さんのところへモノを運ぶだけではなく、地域社会へ眼を向けなければいけない、そのためにこういう経営方針と情報システムが必要なんです。

——日立でのご活躍が良く分かりました。その後、転職されたり、創業されたりするきっかけは何かおありになりますか？

森口 本社での仕事には満足し



て、その時は四〇歳位でしたがこれを一生の仕事としてやって行くのかな？ との気持ちと、もう一つは一年間東京にいますと色々いい声が聞こえてきます。

たまたまインフォネクスという会社の日経の記事が眼に止まったんです。インフォネクスは真藤さんの「民活」で出来た、NTTとベンチャーの合併で、ネットワークSIを標榜する会社でした。

その総務部長に会ったら、取締役が出てきて、是非入社してくれと……。給料は上げる、生活レベルは日立以上にするために家は社宅扱いにする……。平成二年当時はバブル絶頂期でした。名古屋からワゴン車で家族四人揃って横浜へ引っ越ししました。今から思えば、幌馬車で西部へ行くような気分でしたね。

通信技術はデジタル化が始まり、コンピュータもUNIXやパソコンが台頭してオープン化が進み始めた頃です。日立やIBMの考えるネットワークは大型汎用コンピュータがあり、その下に多くの端末装置がぶら下がっているんです。ところがインフォネクスではネットワークが先ずあって、この下に汎用コンピュータやUNIX、パソ

コンがマルチベンダでぶら下がる、発想が全く逆ですね。

——インフォネクスには何年位いらつしやったのですか？

森口 四年です。しばらくしてバブル崩壊があり、業績が急速に落ち込みました。私はネットワークSIに、医療分野のアプリケーションを付加して業績回復を目論見ました。それまで電線だけ売っていたのを、その上に医療の業務を乗せて売ろうと思った訳です。それで情報収集に(財)医療情報システム開発センター(MEDIS)へ通い始めました。残念ながら志半ばにして会社が危なくなつた時、MEDISの人が、お前、医療を良く知っていたなと声をかけ、リコーに紹介してくれたんです。実は、その人は元日立の人でした。

——あー、それでリコーへ

森口 リコーが新規事業を立ち上げるので人を募集しとるよ、行け！と言われました。不況の時代でしたので、医療情報の大家でもある中央研究所の副社長に会わされ入社を了承されました。リコー入社は平成六年ですが、プロジェクトに関連して、直前の平成五年末にシカゴの学会に出席せよとの社命で出張し

ました。そのプロジェクトは、医療等の撮影フィルムを記録できる大容量の記録媒体にUNIX・Windows・Apple 共通

の記録方式に対応して、改ざん防止セキュリティ方式を付加・標準化したものを開発するプロジェクトです。その技術をコアとして、リコーは医療分野に進出するという戦略でした。当時の技術では、大容量記録媒体は光磁気ディスクが本命で、その

ドライブはリコーが作っていました。しかしハードウェア技術の進化は猛烈で、機器・媒体そのものは意味がなくなつてきた。さらに標準化は米国の反対もあり停滞して戦略に影響を受けました。同じ時期から産業医科大学にゆき、「医用画像を含む経年の健康管理情報を蓄積・活用する」ための実証実験を国プロジェクトとして企画・開発しました。健診情報と、じん肺等のX線画像を光磁気ディスクに格納し、手軽で迅速に扱えるよう

になれば産業保健にも大いに貢献できるということでした。健康情報データベースという切り口が出てきたんです。後のPHR (Personal Health Record: 個人健康記録) の考え方の源となりました。

——森口さんの中で蓄積されてきたものの集大成ということが起業のきっかけですか？

森口 リコーでは重要な国プロジェクトに参画し多くの優れた先生と面識を得て、保健医療分野の国際戦略と出会い、自身、情報セキュリティ技術の重要性の理解と先進性を確保することができたと思っています。



しかし、北九州の実証実験も大きな成果が期待できるものの、制度面から、時間がかかることが分かり、また大会社では窮屈な思いもしたので独立しようと思いました。

——そうでしたか

森口 応援してくれる人が何人もあり、嫁さんもいいんじゃない、と言ってくれたので平成十

四年六月に独立しました。保健医療分野の個人情報保護と情報セキュリティのマネジメントに

関して、①コンサルテーション②出版③講演、仕事はこの三つです。当初はコンピュータやSI(エス・アイ)システム・インターネット・システム「開発」に関わるものと思ってい

ましたが、翌年たまたま個人情報保護法ができた。これはすごいインパクトで、情報システム開発とは分野が異なつてしまいました。個人情報マネジメントできていると認定された会社・団体等にはP(プライバシー)マークが与えられます。同様に、情報セキュリティのマネジメントができていると認定された部門・会社・団体には、ISMS(情報セキュリティマネジメントシステム)認証が与え

られます。私は認証に合格するためのコンサルテーションや内部監査の支援をしています。審査をやる資格として、ISMS主任審査員の資格をとりました。医療情報に関しては熟知していましたが、マネジメントシステムに関しては経験がなく、資格だけではコンサルテーションの実践ができないため、受講したISMSの教育機関の優秀な講

師の方と気が合い、実際に顧客先で協力いただきました。さらに、川重系の会社と協業し、ISO9000の専門家の方が特に、一生懸命協力してくれました。二〇〇くらいの健診機関や日立製作所の七つの病院、東芝病院等のPマークやISMS認証取得を支援しました。また、医学研究所のような先端技術の施設のISMS認証取得を長期間コンサルしました。

——お話の中でPHRのことが時折出てきますが……

森口 これまでやってきたことの集大成のような位置づけになります。平成二四年にはPHR協会を設立し、理事に就任しました。PHR(Personal Health Record)は経年の個人の健康情報データベースなんです。医用画像も含まれます。これまでの過去データが全部繋がって、今の健康状態はこうだから、こういう時はこういう薬が効きますよ、またこういう傾向があるから近々にこういう検診を受けるのと良い、というようなサービスも提供できることを目指しています。さらに重要なことは、これらの健康情報を集積して自由に活用し、国民や人類全体の健康増進・医薬品の開発の資料に

役立つことです。色々な時に様々な医療機関で受診したデータを一つに繋ぐためには広範囲に名寄せができる必要があります。マイナンバーの考え方が重要になります。また、機微な個人情報報の塊りですからセキュリティは必須です。PHRはこのような個人健康情報が蓄積されるデータベースです。これはいわゆるビッグデータで、滋賀大で新設されるデータサイエンス学部の領域に含まれるべきものです。

最近、森口さんが大学改革のことで学長にお会いになられ、色々なお話をされたと同ってあります。

森口 七月九日に彦根へ行って佐和学長にお会いしました。予定は一時間までだったのですが、お忙しい中にもゆっくりとお時間をいただきました。とても熱心に聞いていただき、議論が白熱しました。今回の文部科学省の通達に対して、学長が目指しておられるのは「地方の特色ある大学」ではなく、「世界へ雄飛する大学」を目指しておられると感じました。そのためには、オンリーワンを目指して世界一を勝ち取る戦略が求められます。新学部の創設に際し何を目玉、コアとするか？ 学長は、考え

あぐねておられるように感じました。私は、データサイエンス学部は文系の倫理観にあふれた学部でもあり、技術に偏重した理系の学部ではなくしたい。決して文系・理系に偏重した学部ではないと主張して、学長のお気持ちとも一致しているのを感じました。大学から帰るときにタクシーに乗りましたが、運転手さんは学長が前日、出演されたテレビを見ておられ、常日頃、彦根市民として学長には期待しているとお話されました。



動・進化する社会環境・技術環境へ対応できる、そういうことを是非やってほしい、そのためには何度でも何時でも大学に戻り教育や意見交換を出来る場を提供することを考えてほしい、ということでした。社会で実践経験を積んだ滋賀大学OBが松下村塾みたいなのを作って、また彦根へ帰っておいで、しごいてやるよ、それでまた社会へ戻って活躍してこい……と。医療分野では、関連する技術要素を海外に販売拡大するばかりでなく、日本の優れた医療技術や制度を海外の人々にも紹介し、提供する活動があります。滋賀大学も、医療や金融・証券を含むビッグデータの海外戦略を持ち、特にアジア諸国のお役立ちを目指すべきだと思っています。

——本日はお忙しいところ貴重なお話をいただき、ありがとうございます。

スタッフ募集

陵水会東京支部機関紙

「東京陵水」の

編集スタッフにご参加しませんか。発行・年一回の編集作業です。経験不問。

ご宴会・ご婚礼・出張料理
カフェランランドーレ・グリルフクシマ



上野精養軒

〒110-8715 東京都台東区上野公園 4番58号
TEL 03-3821-2181(代) FAX 03-3822-1330
<http://www.seiyoken.co.jp> 年末年始以外年中無休



新学部構想と 母校の行方

平成二十九年度にビッグデータの分析、活用の担い手を育成することを目標に「データサイエンス学部」が彦根に設置される。

この新設を巡って会員諸氏（支部役員・総会出席者）の考え方を探るべく次の設問により意見を聴きした。

①文科省の通知「国立大学は人文社会系学部の見直し、策定、その上で組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組んで貰いたい」について。

「組織の廃止」については否定的な意見が多い。

転換への思考は議論が十分尽くされた結果とは思えない。「社会的要請」とは何処から出た要請なのか。人文社会系学部は、即社会に役立つというのではなく、実学にとらわれないで、社会科学を学ぶという学問、研究として存立している。しかし人文社会系学部は今後の社会の進歩変化へ向けて社会的要請の高い分野に前向きに対応すべきと

の見解も根強い。

この通知を「暴論」として怒りもあるが、即座に人文社会系学部の廃止と拡大解釈するのも問題だ。

②「データ・サイエンス学部」の印象はどうですか。

多くは好意的にとらえている。文系の中に理系を設置することによりメリットがある。時宜を得た構想で、社会の動きを先取りしている。新学部の名称が今日的だ。素晴らしい専門の教授陣と学生、カリキュラムの高度化を期待する。

しかし内容を突き詰めて取り上げていくと、理系と文系のはざまで判りにくい。扱うデータの入手、研究対象として活用の仕方イメージが浮かばない。どのような学習が展開されるのか想定が難しい。社会的要請に具体的にどうこたえるのか。など熟慮を要する問題がある。

③新設学部と経済学部を対比して期待すること。

期待するところが多い。

IT・数学に人材の誕生。現実に合わせた理論の学習と外部との情報交換による予知予報技術の獲得。今後に向けては優秀学生の獲得。カリキュラムの充実による高校生、受験生への発信。

信。ビッグデータの活用。現在と次元の違うところからのレベルアップ。更には新学部からの輩出者が増えて、知名度、評価の引き上げに期待。

④経済学部が財政的にも難しい立場にあるが、組織、陣容、学生の規模からみての見解。

現状を把握する材料に欠けると言うことで明確な意見が得られなかった。彦根高商の伝統を活かして創立の意義を見直す。母校への寄付の貢献度を明確にしたり、教員の担当を増やす事も一考。特色を鮮明にしてその保持。教育のクオリティの抜本的見直し。

⑤三学部になり同窓会の変容もテーマになると考えられるが、陵水会のありかたは。

現在の陵水会へ新学部のOBを吸収、彦根校舎として今までどおりの同窓会形式を望む意向が強い。

⑥将来的に行政の効率化の一環として、国立大学の併合が問われる時期もあるが、母校の対応はどう希望しますか。

この問題は何回も取り上げられ、その都度しほんでゆく過程を踏んできた。できれば現状を充実したものとして併合は避けたいのが大方のところである。

行政の効率化と教育は相いれない。伝統と特色を大事に。きりりと光る存在であって欲しい。また大きな流れとして併合は賛成だが相手による。新学部の社会的評価を得てからの併合を考える。理工学部、医学部が無いのが併合の道筋になってしまふ。

併合を肯定的にみる意見としては、併合は時代の流れだから存在価値を高めておく。特色ある理系大学、滋賀医大、滋賀県立大との併合を考える。合併による大型化で共通単位の取得、教育の質的向上。

アンケートへの回答の形で提示したが、問題の性質上、票数の多少で纏めるものではないので、回答者の意見を集約した。

回答のまとめ方には異論もあると思うが、文責は編集部にある。答えにくい設問に真摯に対応頂いた回答者にお礼申し上げます。

小粒でもピリリと辛い、 少数精鋭の 滋賀大学経済学部を

乗 富 俊 二（大9）

滋賀大学卒業後の略歴を申し述べます。一九六一年四月（昭和三十六年）卒業後、東洋レィヨン（現東レ）に入社。一九六四年四月より一九六七年六月の約三年間、東レとデュポン社（米国）との合併会社（東洋プロダクツ）に出向。一九六七年七月に東レを退社、英国のランカスター大学（修士課程）に私費留学。専攻はマーケティング。修士号（MA）取得後一九六八年十月にジレット社（米国）に入社、その後シーグラム社（米国、洋酒メーカー）、ギネス社（英国、洋酒部門）に勤務し、一九九六年ギネス社を定年退職。職責は、これら外資系三社の日本法人の代表を勤めました。

勤務した国は、日本、カナダ、オーストラリアの三カ国。海外在住期間は延べ約三年間。本社所在地のNew York（シーグラム社）とLondon（ギネス社）への出張回数は無数。かような職歴は滋賀大学卒業生の中では異色なものではないかと思えます。

陵水会年報平成二十七年

度（二〇一五）に記載されて

いた「平成二十六年就職状況」

の記事に興味をひかれました。

私が卒業した五十四年前に較

べ、日本経済の構造も大きく変

化しました。平成二十六年

度の卒業生の就職先企業名を見ても、

それらの企業が生涯を託するに

値する企業なのか、また他校の

卒業生に較べて遜色のないもの

なのか、判断ができません。後

輩の皆さんが、将来性のある優

良企業に就職し、会社・社会に

貢献する人材に育ち、我が母校

の名声を高めて欲しいと願って

おります。

学部（或いは学校）の評価は、

その時代に於いて優良企業と目

される会社に如何に多くの卒業

生を送り込めるかによって評価

がなされるのではないでしょう

か。同じ記事の中で小野晶生先

生が文科省通達の「国立大学の

教員養成や人文社会学系の学

部・大学院の廃止・転換」に触

れ、〃本学が絶滅危惧種に指定

され、お取りつぶしの崖っぷち

に立たされたようなものです。

と述べておられます。まことに

衝撃的です。まさに、これから

は、国立大学はサバイバルゲー

ムにさらされていることを痛感

しました。

こういった厳しい状況下にお

いて、我が母校はいかにして生

き残り（survive）、発展して行

けばよいのでしょうか。



それには、他校に比べ滋賀大

学経済学部としての特徴（ユニ

ークさ）を出す必要があります。

即ち、差別化です。それには、

まず建学（彦根高商）の精神に

戻ることが必要なのではないで

しょうか。あの時代に、なぜ高

等商業学校を官立で開校する必

要があったのか。国が意図した

ことは、即経営実務に役立ち、

将来会社経営を担うことができ

る人材（幹部候補生・ビジネス

エリート）を育てることに主眼

があったのではないかと推測し

ます。

しかし、時代の流れのなかで

他の官立の高商とともに、我が

母校も建学の意図が薄れ、国立

総合大学の経済学部と同質化し

て行ったのではないでしょう

か。即ち、特徴の無い one-of-them

になってしまったのです。

ではどうすれば、我が母校は

ユニークさをとりもどせるのか。

そのための私案を二、三申し上

げます。

一、ともかく、徹底的にプレッ

シャーをかけて勉強をさせる

カリキュラムをつくる。

日本の大多数の学生、特に文

系の学生（かつての私を含む）

は、勉強不足。英米系の一流と

称される大学でのプレッシャー

は、半端ではありません。日本

では、大学受験が厳しかったため、

大学に入学した時には、学生は

燃え尽き症候群に陥っています。

〃滋賀大学の経済学部では物

凄く勉強をさせられる。との評

判が、世間（企業間）で立てば、

企業の滋賀大学経済学部（卒業

生）に対する評価は上がります。

ワークスアプリケーションズ

のCEO 牧野正幸氏は、〃残念

ながら日本の大学を出て社会人

になっても、即戦力になる若者

は少ない。詰め込み型の受験勉

強が優先され、自分で考えなが

ら課題をクリアしていく教育が

されていないからだ。そのため

企業側は学生を大量に一括採用

し、自社の研修で教育してき

た。と述べておられます。（日

経朝刊二〇一五・十・一）この

コメントは、学校側にとっては

大変恥ずべきことです。

二、プレゼンテーション技法、

講座を設ける。

効果的なプレゼンテーション

（presentation）を行うには、

問題の把握、その分析、解決策

の提案、簡潔なコミュニケーション

能力（言語力）及び Power

Point の習得が要求されます。

準備には数多くの参考文献を読

み、ビジネスに関する知識や分

析技術（tools）を身につける

必要があります。プレゼンテ

ーション能力を養うことは、企業

に入ってから大いに役にたちま

す。この講座は、三回生くらい

から始めるとよいでしょう。ま

た、この講座ではケーススタデ

イ（case study）を用いますの

で、思考訓練にもなり、一石二

鳥です。牧野氏が指摘している、

企業側の要請にも応えうる人材

が育つと思います。

三、経営倫理（Management

Ethic）講座を設ける。

そこで教授と学生の間でケー

ススタディを通じて、徹底的に

白熱の議論をする。将来経営幹

部になった時に必ず役にたちま

す。昨今、日本の有名企業で起

こっているスキャンダラスな事

件を鑑みても、この種の講座の



株式会社 金乃台カントリークラブ

支配人 鎌田 和美

〒300-1211 茨城県牛久市柏田町 3432

TEL 029-872-0182 FAX 029-872-3182

『今年も皆様のご来場をお待ちしております』

重要性がご理解いただけだと思います。講座は一回限りで終わらせるのではなく、繰り返し定期的にを行うのが良いでしょう。小粒でもピリリと辛い、少数精鋭の滋賀大学経済学部になることを切望します。

世界でたった二冊の本

黒沢日出男（大11）

十年前の退職時、社員一同から『世界でたった一冊のこの本』を黒沢日出男に捧ぐ……と題した本を頂いた。

見開きのページに私の顔写真を配し、全十六ページで総社員の約四十パーセントに当たる八十二名のメッセージ・コメントが手書きで寄せられている。

各ページには、私が関わった懐かしい施工現場写真が配され、飯野ビル・文部省・全共連ビルなどが掲載されている。

更に、防水ジャーナル誌（月刊誌）に私が投稿掲載された随筆、「旅あれこれ」等、また「マレーシアにハマル」も転載（コピー）されている。私と最後の数年間仕事を共にしてバトンタッチした課長Y君。「長年の勤続ご苦労様でした。業界団体・スパーゼネコン関連・施主（公

団・金融・生保）営業新規代理店開拓・等の業績は列記できない程です。今日の私の営業ノウハウの基礎をご指導頂きました。大変感謝しております。」

広島営業所長N君。「思い起こせば、現在の主力代理店の半分くらいは黒澤さんがお入れになったものです。先輩黒澤さんの努力を無駄にしないよう頑張りたいと思います。最後に公私に亘る数々のご指導、心に残るご鞭撻を賜りありがとうございます。」

「一時期私の下で課長職だった手間のかかったS君。「ありがとうございました」。彼が福岡営業所長時代、沖縄市場開拓で楽しく苦勞を共にしたN君（現在取締役）。「長い間ダイフレックスの屋台骨を支えて頂き

ありがとうございます」。社長の信頼が厚いS君（現在取締役）。「大企業相手の立ち居振る舞い、折込み方法など、黒澤

さんの背中を見て、何時もお手本としてきました。今度は自分が皆のお手本となるよう頑張ってます」。当時大阪営業社員A君（現さいたま営業所

長）。「同行営業や説明会でご協力頂き、大変感謝しています。私の大事な財産になりました」。当時大阪営業社員（現東京支店

次長）。「いろいろありがとうございます。那覇空港はお任せ下さい」。技研出身の本社技術指導スタッフI君。「多くの功績を忘れません」。

最後のページには「最後に、黒沢日出男氏の長年のご尽力に、深く感謝し、尊敬の念を持って、ここに我が社とウレタン防水の更なる発展を誓う」。

これには感動した。四十一歳で当時弱小だったこの会社で転職した苦労が報われ、社員から勲章を頂いた思いだ。

退職日を前に、私は社内メールで次のメッセージを『世界でたった二冊の本』の返礼として送信した。「この二十五年間、いろいろな事がありました。総じて云えば、皆様に支えられ有意義で幸せな四半世紀だったと満足しています。送別会幹事さん

から贈られた『世界でたった一冊の本』に心温まるメッセージを寄せて下さった皆様から勲章を頂いた事です。社員の皆様から頂いたこの勲章には感激し

た二十五年間の活動が無駄ではなかったと実感するに至りました。防水ジャーナル四月号によれば、ウレタン防水はこの二十五年間

で施工実績シェアが三倍、建築防水施工実績シェアの四分

の一を超えるまでに成長してきました。当時極めてマイナーだった当社及びウレタン防水につき、布教活動のつもりで頑張りました。彼等には、当社の業界におけるプレス

テージ・認知度が此処まで来たことを報告したいです。ウレタン防水を理解し側面から応援して下さい。諸先生方は、

様にウレタン防水の躍進を喜んで下さっております。そして、ウレタン防水を此処までリードし認知させてきた当社の存在価値を高く評価して下さい。お

礼します。当社がウレタン防水を常々にリードし今日の地位まで至らしめた事実には業界人誰もが認めるところです。この業界における大きな足跡は、我々社員が成し遂げたのです。私は社員の皆さんの成果を対外的にアピール

させて貰いました。この事に、我々ももっと自信と誇り持つて下さい。残念ながらこの五・六年来当社の業績は低迷を続けており残念です。いま、当社は企業再生の瀬戸際にあります。他

にはない優位点を生かして是非再生を成し遂げて下さい。在職中は、大変お世話になりました。このメッセージを送った翌々

日、ダイフレックスグループ有

志一同が送別会をセットしてくれました。そこで感謝の気持ちという事で、ワインケースを贈られた。ケースに入っていたメッセージには、「本日はお忙しい中、お時間を頂きまして誠にありがとうございます。二十五

年間という長い間、当社を支えて頂きましてありがとうございます。本日のメンバーより黒澤さんに感謝の気持ちを込めてプレゼントさせて頂きたいと思

います。お口に合うかどうか少々心配ではありますが、誕生月のワインをお贈りしたいと思います。黒澤さんは、一月二十三日の水瓶座のお生まれとい

うことで、水瓶座は改革とハプニングを象徴とする星を守護星に持ち、未来に目を向ける素晴

らしい科学的な推察力があり、社交性が豊かで常識にこだわらない自由人とありました。そこで、自由人黒澤さんには、太陽

を一杯浴びたフルーツの香り豊かで爽やかな飲み心地と深いコクを合わせ持つ一九九九年もの情熱の赤ワインをお送りします。春の日差しの中で、ゆつくりとグラスを傾けて頂ければ本望です。これからの黒澤さんの人生がもっとも豊かでありますように」。

多分、この心に響くプレゼン
トを選びメッセージを綴ってく
れたのはS君だろう。彼とは、
在職中余り接点が無かったのに
誠にありがたい。優しく優秀な
人材と確信した。

退職後十年を経た今年七月末、
後輩社員五名と楽しい宴に誘わ
れた。東京スカイツリー隣のソ
ラマチタウン三十一階だった。

取締役になつてゐるS君や
N君を含めた後輩社員たちを、
どのように呼ぶべきか迷つた。
役員となつてゐる二人を含め君
づけも良くないのでは？ と迷
つたが、成り行きで行こうと決
めた。

この宴をセットし、リードし
てくれたのはS君だ。彼は私
の転職時、グループのボスの存
在であり、彼に本日のお誘いの
謝礼を述べ、幾つに成りまし
た？ と聞くと六十三歳とのこ
と。

宴を終え、帰宅後メールで参
加した五名に謝辞を送つた。S
君から、「久しぶりに黒澤節
が聞けて愉しかったです。あれ
から二次会を終えて帰宅電車の
中です。」と返信してきた。もう、
零時近くで日が変わるのに！
翌日の仕事、大丈夫だったか
な？

「うみやまあひだ」…日本

服部 進 (大37)

大三十七回卒の服部と申しま
す。このたび、自分がプロデュ
ースを担当しました。映画「う
みやまあひだ」伊勢神宮の森か
ら響くメッセージ」が、第四
回マドリッド国際映画祭で、最
優秀外国語ドキュメンタリー作
品賞と、最優秀プロデューサー
賞を受賞いたしましたことで、
ここでの寄稿のお誘いをいただ
き、恐縮しております。が、滋賀
大学を卒業して、このような分
野で仕事をする方が少ないこと
もあり、何か、皆様におもしろ
がついていただければと思います。

くり〃をしたりといった仕事を
して参りました。
一つの事業が、日本の森から
でる、森を守るために切つた木
(間伐材)の利用を促進し、森
をよみがえらせる仕事です。木
でできたステーションナリーのプ
ランドや、デザインーと組んで
木のおもちゃなどを製造販売し
ています。

また、和太鼓や箏、尺八、三
味線、篠笛といった和楽器で構
成されたユニット「AUNJク
ラシック・オーケストラ」の総
合プロデュースをし、日本の楽
器をもつて、アンコールワット
やモンサンミッシェルなど世界
遺産でのコンサートの仕事掛け
や、アメリカ大リーグ・ポスト
レッドソックスと組んで、フ
エンウェイパークにてアメリカ
合衆国歌の演奏をしたりとい
つた仕掛けをしています。

ここまで書くと、なんで映画
のプロデュースをすることにな
つたのか？ という疑問がわく
のではないかと思います。そう
なんです、自分は、映画を仕事
にしているわけではありません。

あくまでも、自分の専門である
「マーケティング」を、「日本を
素敵だと思つていただく」ため
に活用し、その手段の一つとし

て「映画」という方法を選んだ
ということです。

この映画は、二〇一三年に行
われました伊勢神宮の式年遷宮
をきっかけに、日本の森と海の
関係、自然とのつきあい方、専
門的に言うとすると、循環再
生型の暮らしをしてきた日本
を、写真家宮澤正明監督の4K
を駆使した素晴らしい映像と、
音楽監督立川直樹氏の監修によ
る、和楽器とピアノが融合した
素敵な音楽、そして、北野武氏
や建築家の隈研吾氏、日本No.1
シェフの成澤由浩氏など日本が
世界に誇る賢人十二人に、その
すごさを語っていただいている
ドキュメンタリー映画です。

「うみやまあひだ」というタ
イトルについて、「どういう意
味ですか？」といった質問をよ
く受けますが、これは、「海と
山の間の国」つまり「日本」と
いう意味になります。

日本以上に、海外での反応は
とても面白いもので、マドリッ
ド国際映画祭だけでなく、世界
三大ドキュメンタリー映画祭の
シエフイルド国際映画祭でも、
ファイナリストに選んでいただ
いたのですが、監督のスピーチ
の際に、質問をお受けすると、
日本の二十倍！ は手があがる

のではないかと思います。海外
の皆様にとっては、一三〇〇年
間、毎二十年ごとに、約一万一
千本の檜を使って、全てを新し
くする行事を続けていることや、
一四〇〇年間、毎日朝晩に、水
を汲み、手で火をおこし、お米
を炊いて、神様に奉納するとい
うことをしている日本という国
に、畏敬の念をいだくようです。
この反応は日本人としてとても
嬉しいことです。

日本人は日本のことを知らな
さすぎます。この映画は、伊勢
神宮をベースにしているのので、
とかく宗教的な映画と勘違いさ
れることがあるのですが、日本
の基本をお伝えする映画になっ
ていると思っています。正直、
公開前は、全然お客様に入つて
もらえず、興行的には収益をあ
げるのは難しいかなと思つてお
りましたが、二〇一五年四月に、
東京二子玉川で公開した際には、
一ヶ月間満席という評価をいた
だきました。特に、大学生など、
若い方々が見に来てくれて、感
想をいただけるという経験は、
プロデューサー冥利につきますな
と思つています。

仕事柄、海外で活躍されてい
る日本人の方に多くお会いしま
すが、世界のことは会社で勉強